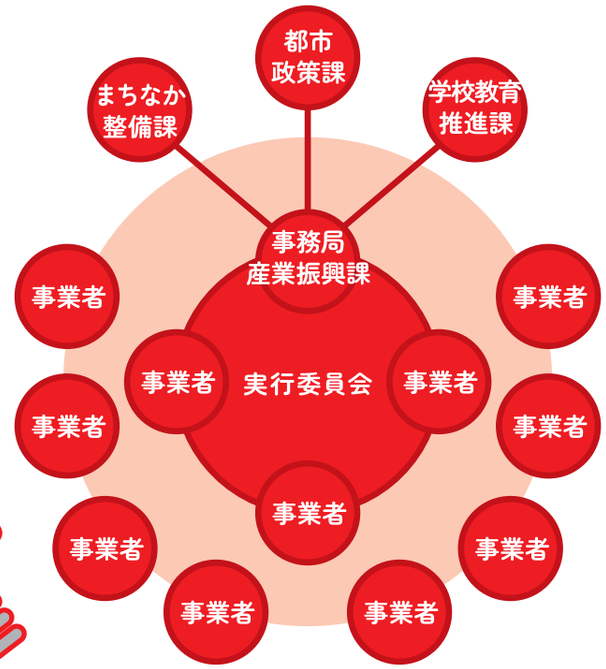
オープンカンパニー 概要

普段は入ることのできない企業や工場の中を、市民のみなさんに公開、体験いただくことで、企業の魅力を伝えたり、ものづくりの楽しさを知ってもらう取り組みです。学校などの依頼に基づき企業が見学者を受け入れる社会見学とは違い、企業自らが主体となって公開するもので、茨木市では、令和5年度に製造業の工場見学イベント「オープンファクトリー」として実験的にはじまりました。大好評に終わった試験実施を踏まえ、令和６年度からは、「オープンカンパニー」に名前を変え、参加する企業と市民を増やしながら事業を進めており、参加者の高い満足度だけでなく、企業側からも社員のやる気向上や誇りにつながっているなど、多面的な効果をあげています。

所管課｜産業振興課

参加主体

- 事業者　市内の民間企業
- 団体　茨木商工会議所
- 行政　都市政策課、まちなか整備課、学校教育推進課など



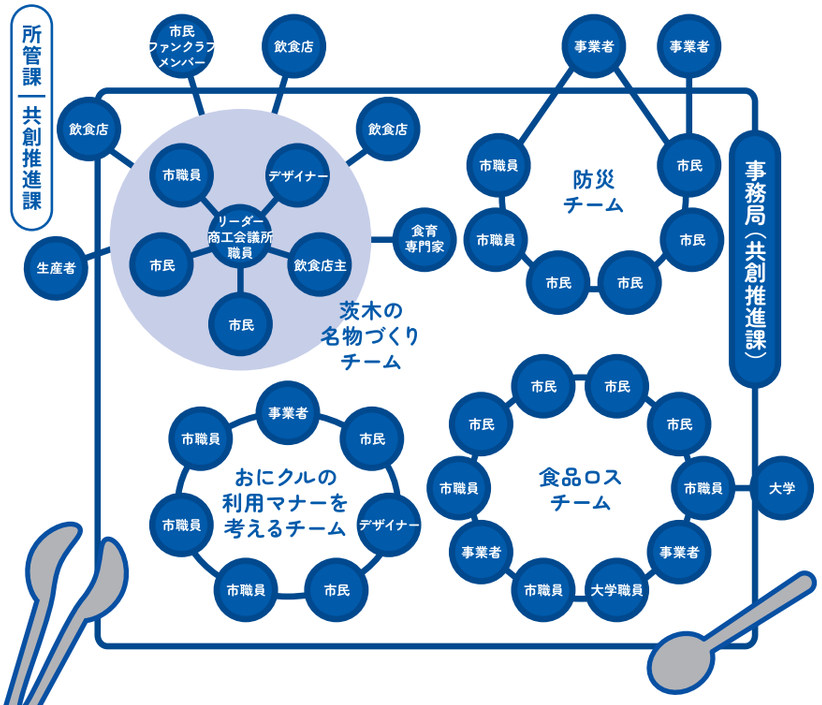
茨木共創部 概要

市民、大学、事業者、行政など様々な参加者が集い、おにクルを舞台として、まちをよりよくする共創の企画を考え実践する、クラブ活動のような取り組みです。4つのテーマ（茨木の名物づくり、防災、食品ロス、おにクルの利用マナー）でチームにわかれ、リサーチや先進事例の視察をした後、自主会を繰り返しながらチームそれぞれのお試し企画を実施しました。企画を進める中で、関連する事業者などとの関わりが広がり、新たな主体の参加でより活動が充実しています。

所管課｜共創推進課

参加主体

- 事業者　あいおいニッセイ同和損保、大阪よどがわ市民生活協同組合、おにクルみらい、成田家、みくりや青果、無印良品など
- 団体　茨木商工会議所、東奈良小学校区自主防災会、きゃぱす（茨木市市民活動センター）
- 教育機関　大阪成蹊大学、梅花女子大学
- 市民　市民活動団体、学生団体など
- 行政　文化振興課、子育て支援課、産業振興課、都市政策課、公園緑地課、おにクルぶっくぱーく



みんなでイベントをつくる

いばらきオープンカンパニー「いばらき、クルクル。」のレシピ

実行委員会を立ち上げ、プロジェクト型からコンソーシアム型へ

材料

- ●事務局・ファシリテーター（産業振興課）
- ●取り組みに共感して参加してくれる主体（茨木市内の事業者）
- ●協力団体（茨木商工会議所）
- ●行政関係課（まちなか整備課、都市政策課、学校教育推進課）
- ●イベントに参加する市民

1 材料をそろえるための準備（ヒアリング）

参加してほしい企業にお誘いを兼ねたヒアリングを実施。実際に参加につながるのは半分以下なので、参加想定の3倍、17社にヒアリングした。生コンクリートの製造会社、プラスチックボトルの製造会社、石材屋、青果店などが参加。

・参加したいと思ってもらうためにニーズを把握する
・参加主体を発掘する

2 下ごしらえ❶（実行委員会）

産業振興課が事務局となり、イベント運営に関わる主体として3社が入って実行委員会を立ち上げた。

・運営に関わる主体が、意見を出し合って進めていけるようなカタチをとる（そのためには実行委員会などの組織を立ち上げることが効果的）

3 下ごしらえ❷（説明会）

6〜7月の2日間、募集をかねた説明会を開催し、参加を検討している企業が情報収集しやすい環境を整えるよう心がけた。その後、8月まで参加企業を募集。

・実行委員会に参加する以外の主体に、目的やスケジュール、ゴール設定を理解・共感してもらい、参加者全員の足並みを揃える

4 混ぜ合わせる（勉強会&視察会）

9月からのイベント開催に向けて、プログラムや運営方法を検討するワークショップ形式の合同勉強会を開催。自分たちの得意なことを活かしながら、参加者にどう楽しんでもらうか意見交換した。また、3回開催したうちの1回は大分県のオープンファクトリー（30社が参加）を視察した。

・新たな知識を得る機会、仲間と一緒に学び合う時間は楽しく、参加のモチベーションになる
・参加主体同士のネットワークづくりにつながる。良好な関係を構築することが「楽しさ」「共感」を生み出すポイント

5 味見する（リハーサル）

社内研修で実際にシミュレーションを行ったり、家族やオープンカンパニー参加企業を招いてリハーサルを実施したりした。相互でリハーサルに参加しあったことで、コミュニケーションの機会を創出した。

・まずはやってみる、試行錯誤する機会を設ける

6 仕上げ（広報、一般募集）

一般参加者に向けて参加を呼びかけるチラシを作成し、市内各所に配架した。学校教育推進課と連携し小中学校にも配布。また、令和7年11月の広報誌に4ページの募集記事を組んで掲載してもらった。

・広報で協力してもらうことも共創への関わり方の一つ。できるだけ多くの連携先をみつける

7 盛り付け（イベント開催）

開催日は、参加してほしい対象に合わせて曜日や季節を検討し、金曜日と土曜日の2日間開催、446人が参加した。当日の様子を写真や動画で記録した。

・事業の枠にはめるのではなく、それぞれの得意を活かせる「余白」や「関わり代」を残すことが大事

8 食後に（ふりかえり）

参加企業全てにヒアリングを実施。また、2月にみんなで集まってふりかえり会を開催し、次回の開催に向けて機運を高めた。

・参加主体が集まって意見や感想を話し合うことで、イベント全体の成果・課題が見えてくる
・一緒にやってきたことをみんなで確認する場、プロセスを共有する機会となる

Communication ひらく
Collaboration 一緒に
Cheerful 楽しい
Challenge お試し

コラム

プロジェクト型からコンソーシアム型へ移行に向けたコツ

コンソーシアム型は、参加する主体それぞれの特徴や利点を活かし、みんなでつくり上げていく共創のカタチです。一方、プロジェクト型は、1つの主体が中心となって、連携主体を広げながら取り組みを進めていくもの。したがって、プロジェクト型からスタートし、コンソーシアム型への移行を目指すパターンもあるのではないでしょうか。それには、連携主体から実施主体へと引き上げ、それぞれが主体的に（より自分ごと化して）事業に関わるチームづくりがポイントとなります。

- 実行委員会は主体的に参加するメンバーを募る（依頼ではなく、手あげ方式での募集や声がけ）
- 実行委員会及びプロジェクトに参加する主体同士の良好な関係性を築くことが大切（自己紹介、お互いを知る時間をたっぷり設ける）
- 参加主体がやりたいことを活動の中心に据える
- 会議自体が楽しくなるような工夫（会場の設え、お茶やお菓子など）

茨木共創部のレシピ

集まる場と機会をつくり、活動を生み出す

参加者みんなで考え、試し、つくり上げていく場

1 キッチンの準備
（枠組みを整える）

検討したいテーマを想定し、キーマンとなる主体をリストアップ。テーマに沿って参加者が自由に取り組めるよう、ワークショップ形式で話し合って進める場とした。

・事業目的に向かって参加者みんなで考え、実践できる枠組み（今回であればワークショップ形式）をつくることが大事

2 献立を考える
（ヒアリング）

行政関係課や茨木市が連携協定を締結している事業者、大学などにお誘いを兼ねたヒアリングを実施。結果4つのテーマ（右ページ参照）が決まった。

・参加したいと思ってもらうためのニーズを把握する

・事前にしっかりコミュニケーションをとることで主体的な参加につながる

3 材料の調達
（参加者の募集）

チラシを作成して参加者を募集した。並行して、これまでおにクルの取り組みに関わった人たちには個別に声かけをした。

・ひらかれた参加の機会をつくる

4 下ごしらえ
（キックオフ会議）

10月に参加者全員が一同に集まるワークショップを開催。緊張をほぐすアイスブレイク（共通点探しゲーム）などを盛り込み、参加者同士が知り合う機会をつくった。

・継続して参加したくなる楽しい雰囲気づくりを心がける。

5 調理開始
（グループわけ）

テーマごとにグループをつくり、参加者が興味のあるグループにわかれるよう促した。グループ内では顔合わせはもちろん、参加者のやりたいことや興味のあることを共有した。

・「課題」ではなく「自分のやりたいこと」をベースにグループにわかれる。やりたいことがなければ、おもしろそうな「誰かのやりたい」に乗っかるのもあり

6 煮込む
（自主会）

＼コツ／
事業者・学生は、ある程度方向性や取り組み内容が決まっているほうが参加しやすい場合がある。声かけにもタイミングや工夫が必要。

各グループで月一回程度の自主会を開催した。テーマに沿った活動に向け、アンケートや情報収集等のリサーチ、先進事例の視察などで学び合い、活動内容を検討。自主会を重ねることで、グループの関係性は次第にチームに変化。

※チームとは目標や目的を共有する集団

・小さな目標をみんなで決めることで、参加者の主体性につながる

・一緒に学ぶ時間や経験、作業を積み重ねることで「共感」や「楽しさ」がうまれる

7 味見と調整
（全体共有会）

12月に全体共有会をワークショップ形式で開催した。それぞれのチームのリサーチ結果や活動の進捗を発表した。

・チーム同士が刺激を受けて、新たな方向に活動が発展する

8 盛り付け
（取り組みの実施）

2月には、各チームが内容にあわせて活動の場所を検討し、おにクル各所でプログラムやリサーチを開催。おにクルぶっくぱーく内の本来貸し出していない場所でもお試しで活動した。

・できる限り禁止事項を設けずに、小さく試してみる

・小さな成功体験を積み重ねていく

9 食後に
（ふりかえり）

実施後はチーム内でのふりかえりに加え、4チーム全体で集まって取り組みを発表しあうことで、感想や学びなどを共有した。

・一緒にやってきたことをみんなで確認する、プロセスを共有する機会となる

・「やって良かった」「楽しかった」と感想を言い合える機会をつくる

Communication ひらく / Collaboration 一緒に / Cheerful 楽しい / Challenge お試し

材料

- ●事務局・コーディネーター（共創推進課）
  コーディネーターは実践に向けてグループ内のチームビルディングと取り組みの進行管理を担う。
- ●取り組みに共感して参加する主体（市民、事業者、団体など）
- ●気軽に集まることができるミーティング場所、企画したものを実践する場所（おにクル）

できあがった4つの取り組み

茨木の名物をつくろうと、「とりすき」に注目し、文献調査やアンケートを実施。メンバーだけでなくとり粂や季ごころ廣など、地域のお店の方々にも来ていただき、試作＆試食会を開催。商店街で食材の買い出しをしたり、〆のお米は北部政策課にも協力してもらい入手するなど、飲食店、生産者、専門家に関わっていただきながら取り組むことができた。市内の様々なイベントに出店して「とりすき」を食べてもらう機会をつくり、ファンクラブの立ち上げも検討している。

防災をテーマに、ハザードマップとローリングストックに注目した企画検討からスタート。みんなで考えたプログラムを小さく試行しながら繰り返す中で、取り組みに共感した無印良品やコーナンとの連携につながった。最終的には、おにクル来館者に向けて、避難場所を知るワークや伝言ダイヤル体験、ハザードマップで自宅の災害リスクを知る機会を提供したほか、身近で手に入る市販の防災グッズを展示。行政だけ、市民だけでではできないような共創のプログラムへと発展していった。

食品ロスをテーマとしたプログラムを実施。よどがわ市民生協が抱えていたお酒のキャンセル品と、みくりや青果で生じた野菜の端材という、普通は交わらない、処分するしかない食品を使って、新しい価値を生み出せないか試行錯誤した。お酒と野菜の端材を使った染色ワークショップにチャレンジしたほか、図書館や梅花女子大学との連携により、食品に関する絵本の読み聞かせや〇×クイズ、野菜の端材を使ったスタンプづくりなど、食品ロスについて学べる多彩で楽しいプログラムを展開した。

おにクルに寄せられる課題について「共創」という文脈で解決できないかチャレンジした取り組み。自習による長時間の座席占有という苦情に対して、「禁止」や「制限」など、ルールと分断によるアプローチではない解決方法を、当事者である学生へのヒアリングを交えながら検討していった。最終的には、一般利用者と学生のコミュニケーションの断絶が排除の論理に進んでいるのではという仮定のもと、一般利用者から受験生への応援メッセージを募集するなど、自習していることをポジティブに捉える企画を実施するとともに、学生には課題と応援の両方を伝えて共感を促すなど、おにクルらしい解決方法を試行した。